事例 2 → TEACの最新DACで精密なハイレゾ空間を描き出す

[USB-DACヘッドホンアンプ]

TEAC UD-503

ハイレゾの流れを左右したUD-501の後継機だ。DACチップを刷新して、Windows/Mac環境で11.2MHz DSDに対応する。アナログ回路や電源部もより強化して、ハイエンド機に迫る音質を得ている。

[プリメインアンプ]

ヤマハ A-S2100

A-S3000に次ぐヤマハの高級プリメインアンプ。全段フルバランス伝送、フルディスクリート構成を特徴とし、ファイナル段にMOS-FETを採用している。しなやかな力強さがヤマハらしい。

[スピーカー]

エラック BS263

スピーカースタンドは別売

世界的にヒットした旧240ラインの完全モデルチェンジだ。エラックの象徴といえるJETトゥイーターを新型Vとして再生帯域を拡大。コンパクト2ウエイならではの精密描写が聴きどころ。

コンパクトなUSB-DACにプリメインアンプ、そして小型ブックシェルフというオーソドックスな構成で、「これぞハイレゾ！」というべき精密な音世界を追求したい。しかも予算的に無理をせずに……。

ポイントはTEACの新しいUD-503の起用である。先代のUD-501は2012年の登場。世代交代の激しいこのジャンルでは異例ともいうべき3年のロングランだが、ついに503シリーズに譲ることとなった。プロっぽいフルメタル筐体、そしてデスクトップ向きのA4サイズを引き継いだまま、内容は大きく進化した。

その第一は、旭化成の最新チップの搭載によるハイレゾ対応の拡張だ。DSD 11.2MHz、PCM 384kHzをカバーするだけでなく、S/Nがすばらしい。次に電源部からのデュアルモノ構成も強化され、デジタルプリとしてボリュームが使えるようになった。ヘッドホンユーザーならバランス駆動によるヘッドホン出力がエポックだが、ここではシンプルに単体DACとして使いたい。

イメージとしてぴったりと合うスピーカーはJETトゥイーター搭載のエラックだ。ドイツの精密技術の粋を結集した名門ブランドだが、BS263では自慢の高域ユニットをJET Vへと進化させ、きらめくようなクリスタル・ラインの施された小口径ロングストローク・ウーファーとのコンビはバッチリ。ネットワークももちろん新設計だ。新しい世代を象徴するようなラウンドシェイプのウッドキャビネットがよく似合う。

プリメインアンプはヤマハを選ぼう。A-S2100はUD-503と並べても絵になる精密感があり、フルバランス伝送ならではのS/Nのよさが生きてくるはずだ。MOS-FET素子が力強さとしなやかさを引き出し、BS263を余裕でドライブしてくれる。

音色的にも、デザイン的にもナイスマッチな組み合わせだと思う。ボーカルやロック、クラシックなど、どのジャンルもOKで、最新のDSD音源を高性能レンズでみるような精緻なサウンドで味わうならこれだ。専用スタンドのLS30は別売。

Setting

4 針圧調整

針圧が重い例(左上)と軽い例(右上)(ここではわかりやすいように、極端に設定)。重いとカートリッジは盤面をすり、軽いと針が精確にトレースできない。レコード再生のテクニックのひとつとして、針圧を+1gくらい重くする場合がある。重くすることでレコードのノイズを軽くしたり、傷のあるレコードをトレースできるようになることもある。

Setting

5 針圧をかける

水平の調整が済んだら針圧調整だ。トーンアームの水平がとられた状態で、カウンターウエイトの目盛りを0にして左回しで針圧を加えていく(ここで使用したOrtfon Q30の標準針圧は2.3g)。あわせてインサイドフォースキャンセラーも調整しておこう。もしカウンターウエイトに目盛りがついていない場合は、市販の針圧計を使うことになるが、やはり見やすくて正確なデジタルがいいだろう。カートリッジのパフォーマンスは適正針圧で発揮されるからだ。

Setting

6 ストロボスコープでスピードの確認

セッティングができたら、電源を入れてスピードの調整をすれば完了だ。最近の機種にはストロボはつかなくなったが、ターンテーブルが回転しているときにスコープ内の数字が止まって見えれば適正スピードということ(写真の場合は33 1/3が適正スピードということ)。

Lesson 4

アナログレコードプレーヤーカタログ

現在販売されているアナログレコードプレーヤーの中からおすすめ製品を選んで紹介する。ターンテーブルにカートリッジ、トーンアームがセットになった製品でフォノイコもあるなら、箱を開けたらすぐに使える。

アコースティック・ソリッド Solid 111-System

透明なアクリルベースが特徴の入門機。シンプルなベルトドライブ方式で、ACシンクロナスモーターはドイツの名門Berger Lahr社製だ。プラッターはアルミ製無垢の6.3kg、重量級である。回転精度が高く精巧なメカニズムを印象づける。WTB2Wトーンアームを装着。ダストカバーとカートリッジは別売りだ。

●駆動方式：ベルトドライブ ●回転数：33rpm/45rpm ●ワウフラッター：0.04%以下 ●消費電力：38W ●サイズ：W465×H140～195×D390mm ●質量：23kg ●トーンアーム形式：スタティックバランスS字型

ラックスマン PD-171A

ラックスマンが28年ぶりに開発したベルトドライブプレーヤーだ。上質なヘアライン仕上げで、高トルクのACモーターと5kgの重量級ターンテーブルにより滑らかな回転を獲得。構造面では、15mm厚のアルミプレートに主要パーツを吊り下げるアンダースラング方式が特徴だ。アームベース部の交換にも対応する。

●駆動方式：ベルトドライブ ●回転数：33rpm/45rpm ●ワウフラッター：0.04%以下 ●消費電力：36W ●サイズ：W492×H140～195×D407mm ●質量：25.4kg ●トーンアーム形式：スタティックバランスS字型

デノン DP-500M

デノンのDDプレーヤー入門機だ。コンパクトなウッドキャビと331mmの大型ターンテーブルがバランスよくセットされており、S字トーンアーム+MM型カートリッジつきだ。スピード検出にハイトルクモーターが採用され、起動もクイック（0.3秒以内）。上位モデル譲りのクリアーで安定度の高いサウンドが人気だ。

●駆動方式：クオーツサーボダイレクトドライブ ●回転数：33rpm/45rpm ●ワウフラッター：0.1% ●消費電力：10W ●サイズ：W450×H170×D370mm ●質量：10kg ●トーンアーム形式：スタティックバランスS字型 アームパイプ ●MM型カートリッジ付属

Lesson 1

ヴィンテージオーディオブランドガイド

最近のヴィンテージオーディオは幅が広くなっているらしい。真のヴィンテージ、WEの入手が難しくなってきて、目を向けられたのが1970年代のオーディオ製品だ。主流はマークレヴィンソンらしいが現状はいかに！？

ヴィンテージの定義は筆者の独断で1950〜1980年初頭までとする!?

ひと口にヴィンテージオーディオといっても、時代や製品分野などさまざまだ。トーキー時代のフィールド型スピーカーまで含めると膨大なことになってしまう。

ここは筆者の好みも含め、独断で1950〜60年代からCDが誕生する以前のこれは！という、歴史を耐え抜いた名器を紹介していこう。白状すれば、どれも敬意をもって接してきた至高のコンポーネントだ。

原点はアメリカ&ブリティッシュサウンドになる!?

原点はやはり、アメリカンサウンドとブリティシュサウンドだろう。摩天楼の国アメリカには、そびえたつような巨大スピーカーが林立していた。ホーン全盛だった時代で、JBLのハーツフィールド（1954年）、アルテックのA5が横綱クラスである。

ハーツフィールドはモノラル時代（モノラルなので当然1本販売。ステレオペアでの販売はなかった）の最高傑作だ。一度だけ友人から借用したことがあるが、有名な375ドライバーやゴールドの音響レンズ（ゴールドウイング）が眩しかった。これを優美な一体型のステレオにしたのが、D44000レインジャー・パラゴン（1957年）だ。音が出なくてもこの風格であれば部屋に置きたいと思う。

高級家具調仕上げのJBLに対して、

JBL ハーツフィールド
タンノイのオートグラフと並び称される、モノラル時代の最高傑作スピーカー。本来は1本。

JBL パラゴン
3ウエイステレオをひとつの筐体に。ふんだんに使われたマホガニー……どれも超ド級。

アルテックは劇場用の「ボイス・オブ・ザ・シアター」らしく粗削りだ。私は当時JBLオリンパスとA7を並べて聴き分けていたが、同じ西海岸のメーカーでも好対象といえよう。

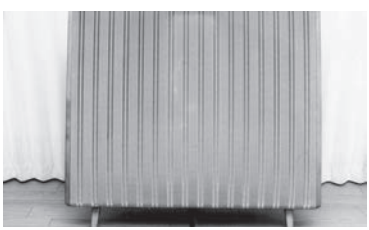
そのどちらでもない巨人がウエストコーストのエレクトロヴォイスで、パトリシアン800は76cmの30Wウーファーを搭載する4ウエイだ。クラシックファンに人気のボザークもそうだが、適度なウエット感のある、重厚な音調が魅力と聞いた。

ところで日本で最大の人気を博すJBLにはもうひとつ、1970年代から登場するスタジオモニターという流れがある。カッコいいブルーバッフルで、4桁ナンバーの4320や名機4343と4344、さらにダブルウーファーで大型の4350などが時代を席捲した。一方アルテックは同軸2ウエイの604系ユニットがあり、20cmのフルレンジでは、JBLのLE-8Tとアルテックの755Eパンケーキが人気を二分していた。私はなぜかLE-8T以外は縁がなかったが、いずれもヴィンテージの目玉としてはずせない。

アンプ部門はアメリカ強し

アメリカはアンプ王国でもある。マランツ、マッキントッシュの両雄を筆頭に、ダイナコやフィッシャーといった中堅どころが健闘していた。だがマランツとマッキントッシュはもう別格で、ステレオアンプに限っていえば、マランツの「7（プリ）＋8B（ステレオパワー：モノパワーのModel 9もある）」に対して、マッキントッシュは「C22（プリ）＋MC275（パワー）」（1962年）という組み合わせが、神のように崇められていた。

音もデザインも好対象で人気を二分した盟友同志だが、飛行場のイルミネーションにヒントを得たというマッキントッシュ・ブルーは、いつ



クオード ESL
ELSならではの平面波音場に驚いたものだ。

アルテック A5
A7をスケールアップした。豪快な鳴り方だ。